

ヴィクトル・セルジュの文学

——ある絶対自由主義者の原像——

山 路 昭

(I)

1967年にスーイェ社からヴィクトル・セルジュの小説集が、⁽¹⁾『革命家たち』(Les Révolutionnaires) という副題をつけ、かれの代表作5篇、『牢獄の人々』(Les Hommes dans la prison), 『われらの力の誕生』(Naissance de notre force), 『征服された都市』(Ville conquise), 『世紀の真夜中に』(S'il est minuit dans le siècle), 『トゥラーエフ事件』(L'Affaire Toulaév) を集めて新しく再版された。このことは、二十数年前メキシコで、行き倒れのように困窮のなかで、その六十年の孤独な生涯を終った、一人の革命家=作家の軌跡がなんらかの意味で今日の状況の下で改めて注目され、考えなおされようとしていることを示しているといえよう。なにはともあれ、この作品集に附せられた『革命家たち』の副題が明白に示しているように、セルジュは革命のために闘い、生き、そして書いたのであった。したがってかれの文学は、まさにかれの具体的な生の、そして闘いの忠実な記録であり、かれが自己の全存在を賭けて生きようとした変転と動乱の二十世紀前半の時代の証言であるという特質を当然の結果として持っている。作家と作品の関係は、一般的にいて作家が具体的に生きた現実を媒介とするものであるが、セルジュの場合ほど、作家の現実における具体的な生き方が、その作品に直接的に反映しているような場合もまたまれなことに思われる。そういう意味から簡単にセルジュの経歴を記してみれば次の通りである。

ヴィクトル・セルジュは1890年ベルギーのブリュッセルで生まれた。かれの父親は『人民の意志党』のシンパとしてロシアを追われた亡命革命家の一人であり、当時は貧しい大学教員であった。『一革命家の回想』(Mémoires d'un révolutionnaire) (以下『回想』と記す)のなかでかれ自身が語っているように、このようなロシア亡命革命家の家に育ったことはかれの一生を決定する重要な要因であった。『回想』によればセルジュの幼少年時代はけっして幸福なものではなく、たえず飢えと戦わなければならないような貧困な状態であったが、かれはクロポトキンの書物によって啓示を受け、学問を学び、知識人としての道を行くことを拒否し、直接的な労働者として印刷工その他の業務に従事しながら、アナキストとしての活動に入っていた。そしてその活動の舞台も移りベルギーからパリへと青春の彷徨が、種々雑多なアナキストのグループとともに続けられ、とりわけ過激な、テロリストの機関誌であった『ラナルシー』(L'Anarchie)の編集にあたっていたため、1913年にテロリストたちの裁判にかけられ、最初の獄中生活を経験する。これらの青春時代の経験がかれにとっていかに重要なものであったかは、かれが当時の体験をまず『牢獄の人々』によって描くことにより、その文学者としての第一歩を始めたことによっても明らかであろう。第一次世界大戦の勃発によって釈放されたかれは、やがてバルセロナに向い、サルヴァドル・セギなどの蜂起運動に参加し、さらに1919年、ロシアに帰国、ボルシェヴィキを支持し、本格的な革命運動に参加した。厳しい内戦下の革命の創世期において、人間の解放、全的自由の確立を目指し、かれがすべての情熱を傾けて、レニングラード・ソヴィエトにおいて党活動に従事し、同時に共産主義インタナショナルの一員として戦ったのはこの時期であった。それからクロンシュタットの反乱がそれを象徴するように1920年代を通じて、スターリンの官僚政治支配体制が漸次強化されていくなかで、かれは、はっきりとその独裁的な傾向に反対の態度を示し、トロツキーなどの左翼反対派のグループに加担し、1928年に逮捕、投獄される。出獄後スターリン治下での自由な政治活動の不可能であることを身をもって知らされると同時に、腸閉塞によって死に直面したかれは、文学活動に専念することを決意する。この時

最初に書かれた作品が前述の『牢獄の人々』であり、ほとんど同時に革命の歴史的ドキュメントである『革命第1年』(L'An I de la Révolution) が書かれている。そして1933年に再び逮捕され、この時はウラルに三年間の流刑にされたが、フランスを中心とした釈放キャンペーン、ロマン・ロランなどの積極的な活動の結果、セルジュは1936年に国外追放となり、そのロシアでの生活に終止符がうたれることになった。この時以来、かれの著作の主要な目標は、『世紀の真夜中に』、『トゥラーエフ事件』などの小説、さらに『革命の運命』(Destin d'une révolution) などの政治的な著述を問わず、スターリン主義の非人間的独裁体制への徹底的な告発に向けられ、それ以前の作品が革命を支える根源的な、内在的なエネルギーの発露を描くことに集中していたのとは、対照的である。(しかしながら後でも述べるようにこの二つの時期を通してセルジュの人間に対する全人的な信念ともいべきものは常に一貫しており、それがかれの文学を支えているのである。) 第二次世界大戦中はマルローなどに近く、⁽²⁾ 対独抵抗運動に参加したが、1941年にはナチの追求を逃れるためにメキシコに亡命し、すべての政治的活動を封ぜられたまま、47年に死んでいる。

「かれはアナキストであり、ボルシェヴィキであり、トロツキストであり、修正マルクス主義者であり、そして彼自身のいうところでは、人格主義者であった。生れ、育ったところという点ではベルギー人であり、帰化したということ及び文学的表現の点ではフランス人、家系の上ではまた後には市民権を得たことによってロシア人でもあったかれは、結局のところ無国籍者となり、その埋葬文書にはスペイン国籍の人物として記されることになった。かれはジャーナリストであり、詩人であり、パンフレットライターであり、歴史家であり、小説家だった……」と『回想』の英訳者であるピーター・セッジウィツクはかれの変転きわまりなかった、劇的な生涯をこのように書いているのだが、なにはともあれ、客観的にいうならば、ヴィクトル・セルジュは第一次世界大戦を前にして青年としての自己形成を行い、両大戦間の激しい、矛盾に満ちた歴史のなかを、自らの全存在を投入することによって生き、人間それ自体の価値を創造しようとした、すなわち二十世紀前半の苦悩を象徴するような、革命的知

識人の典型であったといえよう。

セルジュはその『回想』を次のような言葉をもって書き始めている。

「わたしは幼少時代を終わろうとする前から、わたしの前半生を通してわたしを支配した、たいへんはっきりとした、あの重複した感情を持ったように思う。それは脱路のない世界に生き、不可能な脱出を求めて戦う以外にはないという感情である。」一般的にいうならば、高度な完成に近ずきつつあった資本主義社会の進歩と発展のなかで、そしてそれがもたらす人間疎外のなかで、完全な自由を求めることの不可能であることを感じながらも、なお人間として生きること、「不可能」を可能にすること、そしてそのことのために不断の戦いを挑むことこそ、かれがその一生を通して負わなければならない宿命であった。かれがその前半生において生きること強要された生は、貧困に喘ぎ、飢えと戦わなければならない、いってみれば常に存在そのものを脅かされている絶望的な生活であった。それは温健な進歩と発展のもとに快適な生活を保証されるような、ブルジョア的な市民生活ではなかった。「戦うこと、いったいそれ以外にはなにをなし得るであろう。そして滅びること、そしてそれはさして重要なことではないのだ」というセルジュにおける「不可能な脱出」の戦いの感情はこういったロシア亡命革命家のヨーロッパの都市における不安定な貧困生活のなかから生まれてくるのであるが、その戦いの理念を若いセルジュに明晰に示したものはアナキズムであった。

『回想』にしたがえば、セルジュがアナキズムによって最初に世界に対する啓示を与えられるのはクロボトキンの小冊子によってであるが、実際にかれは十代の後半からベルギーにおけるアナキスト的傾向を持った過激派の若者たちとグループを作り、やがてパリに来て、本格的にアナキスト活動に入り、1913年にはすでに記したように、逮捕、投獄されるにいたった。この時期はおそらくフランスにおけるアナキズム運動の最盛期でもあった。ウドコック⁽³⁾によれば1894年から1914年にいたる十年間は、「フランスのアナキストの行動が最も創造力に富んでいた時代」であり、「幻想と実践の間に有効な均衡がみられ、それは、既存の権力機構を打ち壊す方法においてばかりでなく、より充実した自

由な生活のために男女を訓練する手段において、さらには未来の断片的な素描と考えられるような組織においても、実験的な傾向を伴っている」時代であった。それはまたジャン・グラヴやセバスチャン・フォールによって代表されるようにアナルコ・サンディカリズムの全盛期でもあった。一方、1894年の「三十人裁判」によって潰滅的打撃を受けたテロリスト的な非合法主義者たちの活動もまた続けられていた。これら非合法主義者たちの具体的な運動については、ゲラン⁽⁴⁾、ウドコックなどの書にもほとんど記述がみられず、詳細なことは不分明であるが、セルジュが直接編集の責任者となっていた『ラナルシー』については、ウドコックは『ラナルシー』という独自の新聞を出し始めた個人主義者たちの派においては、主として犯罪によって生きていた集団や個人があった。彼らの中には、アナキズムの歴史上最も悲劇的な人物も最も創造的な人物も何人かいた。マリウス・ジャコブに率いられた一団は、1900年から1905年の五年間にわたり成功のうちに活動し、何百という盗みを実行したが、非生産階級からだけ盗んだことを誇りとしていた。しかしそれよりずっと邪悪なボノ団 (Bonnot) というものもあり、これは新シュティルナー主義者の一味で、1913年に大規模な盗賊行為に乗り出した。その団員の多くは警官との撃ち合いで死んでいる。しかしこれらは1894年以降二十年間におけるアナキズムの一般に建設的な傾向に逆らう例外なのである。」と書いている。

この時点においてセルジュが欲していたもの——それはついにかれの一生を貫いての欲求でもあったはずだが——それは、抽象的でない「絶対的自由」であり、「たとえそれがいかに絶望的なものであるにせよ、窒息させるようなこの社会から脱出を試みるための生の規範」であった。そういう意味から、セルジュは「アナキズムは多くの矛盾を抱え、いくつかの方向に分裂しながら、まずなによりも行動と言葉の一致を要求していた。だからこそ、わたしたちは過激派の方へ向ったのであり、それは厳しい弁証法によって革命を見据えながら、ついに革命そのものをもはや必要としない方向であった」と書くのだ。このような「絶対的自由」を求める精神をかれがより多く見出すのは、一般に建設的な傾向にあったアナルコ・サンディカリストたちの方ではない。かれはむしろ

る『^{タン・ヌーボー}新しい時代』の大御所であったジャン・グラヴなどの術学的でアカデミックなアナキズムへ反撥したのであった。仮借ない現実のもとで社会の底辺に喘ぎながらも、厳然として怒りに燃えて自己の原理に忠実であらんがために、死を賭してまで、この「脱路なき世界」に孤独な戦いを挑もうとする人々の群のなかにこそセルジュは^{リベルテール}「絶対自由の精神」を見出そうとする。例えば『回想』のなかでかれが語っているもっとも強烈な個性と創造性に富んだ人物は『ラナルシー』の創設者で、アルベール・リベルタード (Libertade——スペイン語で自由を意味する) と呼ばれる人物である。南仏のミデイから乞食をしながらパリへやって来たといわれるリベルタードについては、その経歴、本名などに関しては一切だれにも知られていなかった。両足の悪い不具者であったが、モンマルトルの丘の貧民の群の中で激しい調子の街頭演説を行い、「革命を待つにはおよばない。革命を約束する者は、すべて道化役者の如きものである。自己の革命をなせ、自由な人間となり、友情に生きるのだ」と主張していた。かれ自身の生活もしたがってまったく社会の常識を無視したものであり、例えばつきつきと二度にわたって、姉と妹の二人と同棲し、出生した子供の届出を拒否して「法律などは悪魔にくれてしまえ」と罵っていた。常に争闘を好んだかれは松葉杖をふるって乱闘の先頭に立っていたが、終にはある乱闘事件の結果、重傷を負って1908年に死亡したのであった。

このような無法な、テロリストたちに共通したいくつかの要素をあげてみるならば、第一にはかれらの行動が深い絶望に根ざしていることである。セルジュの言葉にしたがうならばわれわれの思想の背後には「形を成さない、広い、重いしばしば押し潰すような、深い存在についてのわれわれの感情が存在している。このような領域においては、われわれの思惟は深い絶望に根ざしている。なすべきことはなにも存在しない。この世界は内なる自己においては受け入れられないものであり、世界がわれわれに造りだした運命もまた受け入れられない。人間は敗れたものであり、失われたものである。」というほとんど絶対的ともいえる存在についての絶望感である。このような絶望はしたがって死とうらはらのものであり、そこから「戦うこと、それ以外になにをなすうで

あろう、そして滅びること、それはさして重要ではないのだ」という戦いの原理が生まれて来るのは、さして難しいことではない。一方に「絶対的自由」を求める精神の希求があり、一方に打ち勝つことのできない「脱路なき世界」がある時にこそ、「不可能な脱出」を求める個と社会の戦いの原理が生まれて来るのであった。

第二には、かれらテロリストは大衆のなかの「迷える力」(Force errante)であった。かれらをはげ口の無い、苛烈な闘争にかり立てていったそのエネルギーの源泉は、本来大衆に内在する自発的アナキ-ともいうべきものであった。セルジュはそういった内在的エネルギーの根源をパリの底辺の無法者に見出そうとする。かれらは定職もなく、財産もない得体の知れない、あやしげな仕事に従事したり、ろくに住居もないような、浮浪者や泥棒連中であつた。かれらこそ、社会から脱落したもっとも深い所で社会から疎外され、絶望に根ざした生活を送っている人間であつた。そしてまた当時のパリの労働者たちの大部分はこのような底辺の無法者たちと共通の基盤をもって生きていたのであつた。それは資本主義社会のいわば恥部であると同時に、その繁栄の対極にあるものであつた。ダニエル・ゲランが『絶対自由主義マルキシズムのために』⁽⁶⁾のなかで述べているように、「自発性」と「意識」の問題は革命的闘争のなかでもっとも重要な問題の一つであり、いわゆる絶対自由主義者と呼ばれる傾向の人々はつねに大衆の内在的な自発性をもっとも重要視してきたのであるが、それはセルジュの場合もまた同様であつた。下層の労働者とは本来、底辺の無法者にもっともよく代表されるような「戦闘的かつアナキスト的精神を持っており、それは二つの相反する方向の運動、すなわち、真のプロレタリアートを新しい偉大な理想をもって具体的な諸要求のための闘争に導こうとするC・G・Tの革命的なサンディカリズムの運動とアナキスト・グループの定形のない運動の源流であつた。」したがってセルジュは常にかれらが本質的に内包している激しいアナキ-な、自発的な生の根源的な力^{フォルス}に目を向け、そのような力のなかにこそ「不可能な脱出」を戦う源泉を見出そうとするのであつた。

しかしながらセルジュはこのような非合法テロリストたちの絶望と内在的な

力を認めてはいるにせよ、かれらを全面的に容認しているわけではない。セルジュにとっては、かれらと同じような深い絶望をふまえながらも、そしてかれらと同じような内在的な力を、やり場のない非合法的なテロ行為ではなく、革命という人間の全的解放に向けていくことこそかれの課題であった。そのことは『牢獄の人々』『われらの力の誕生』などの作品の基本的なモチーフであると同時に作品を生み出す、原動力でもあったのであるが、これらの作品について語るまえに、この時代において若いセルジュに深い影響を与えた、ロシア亡命革命家の一団との触れ合いについて述べておきたい。

「かれらの（テロリスト）直線的な思想と冷酷な怒りと社会に対する仮借ない認識からわたしを守ったものは、幼少時代からの、ロシア人たちの根強い希望を強く秘めた、人間的な価値に富んだ世界との接触であった。」とセルジュが、はっきりと述べているように、そしてまた同じく『回想』のなかで繰り返して語っているロシア的特質とは、かれにとっていかなる意味を持っていたのであろうか。セルジュが育ったのはロシアの亡命革命家の家庭であり、そこには古くからの厳しいロシア的な伝統の雰囲気^{マクシマリスト}が溢れていた。毎日家族や家庭を訪れて来る知人たちの間では、処刑された革命家たちの肖像を前にして、いつも革命に関する裁判、死刑の執行、シベリアへの流刑、脱走などについて会話がかわされていた。そしてかれらはつねに革命の偉大な、人間的な思想について語っていた。さらにパリにおいても、セルジュはロシアの革命サークルと交渉を持つようになり、そのなかには社会革命党員をはじめとして、最大限主義者のテロリストやアナキストなど後年のセルジュに多大の影響を与えたと思われる、さまざま、多彩な革命家たちがいた。したがって当時のセルジュは「パリの無法者たちの影響を受けて、たえず牢獄に近づきながらも、自由と尊厳を夢みている、脱落し、解放されたルンペン・プロレタリアートの生活と、ロシア人たちにまじって、犠牲と力と文化によって啓発された、はるかに純粋な空気を呼吸する生活」という両者の影響を受けていた。おそらくセルジュのような生い立ちの人間にとってほど、ヨーロッパの先進資本主義国、とくにフランスのような国における革命家たちとロシアのような後進国の、それもツアーの

専制政治のなかで育てられた革命家たちとの持つさまざまな意味での相違はだれよりも強く感じられ、認識されたことであろう。これらのロシアの革命家たちは、なににもまして、ツアーの専制政治という厳しい、血と犠牲に充満した非人間的な状況のもとで生きてきたのであった。かれらは、自己の存在のすべてを脅かされ、「それをおいてはかれらの生活がありえなかった非人間的な闘争」によって形成されたのであった。かれらは、人生において「戦う」というただ一つの目的しか持ち得ず、ただそのことのためにのみすべてを犠牲にするような精神の持主であった。たとえば『回想』のなかでエピソードが語られているその一人であるソコロフという人物は、当時のパリで行われていた反政府デモに対しても嘲笑的で、ただひたすら冷静な意志のもとに「実験室」で爆弾^{ラボラトワール}を製造して、テロ活動に備え、壮烈に警官に武力で抵抗し、「たとえどこで倒れようとも、革命を生みだし、圧制された人々を目覚めさせるならば」と叫んで倒れていった。こうした人々は、「嵐のなかから生まれ、嵐を内部に持った怒れる理想主義者たち」であった。かれらにとっては、幸福で快適なヨーロッパの都市生活は特権的なものであり、憤激の的であったことは当然であろう。そういう意味では、セルジュほどヨーロッパの都市文明に対して、あらわな反撥を感じ、それを無視しようとした作家もまた少いであろう。かれが都市に見たものは、あくまでも文明の底辺にうごめいている、絶望した人間の悲惨な状況なのであった。したがって当時のセルジュにとって人間的なもの、すなわち文化の根源はつねにかれにとっては未だ見知らぬ祖国ロシアに求められていたはずであった。『回想』のなかで、かれがパリで出会ったロシアの詩人グミリョフは「わたしは伝統主義者、王政主義者、帝国主義者で汎スラヴ主義者だ。わたしは正統キリスト教が造りあげた真のロシアの本質を持っている。あなたもまたそうなのだ、まったく反対なのだが、自発的アナーキー、根源的な激情、混乱した信仰などという面で真のロシアの本質を持っている。」とセルジュに語るが、これはまたかれ自身のロシア文化の持つ特質に対する認識であったといえよう。かれがロシア革命家のなかに見出そうとしていた、こうした、「人間的価値」は、同時にまたセルジュにとって、かれが一生涯持ち続けようと

した人間的な理想でもあったはずであった。なぜならば、かれにとっては、祖国ロシアとはすでにそれを見知らぬ青年の時代からの憧れであり、革命に裏切られ祖国を追放されてから後も、このような想いはつねにかれの内部に生き続けていたことを、かれの書物が明白に物語っているからである。さらにセルジュ自身もまたけっして断念することのない精神をもって、モーリス・ナドーのいうように「歴史において犠牲者として姿を現わすこと」を激しく拒みながら、戦い続けたのであった。そしてそのような戦いの意味もまた「わたしは、ロシアのインテリゲンチヤによって、まさしく人生の意義は意識的に歴史の形成に参加することにあると早くから教えこまれていた」と書いているように、ロシア革命家たちとの接触によって明らかにされていったのである。

(Ⅱ)

「悲しみが通り過ぎて行き、人々が生きていくことはわたしにとって、大きな驚きであった。生き永らえることは、とりわけ困惑すべきことであるが、わたしは、それをほかの理由からよいことだと考えている。もしそれが生き永らえなかった人々のためでないとするれば、どうして生き永らえるであろうか。このようなぼんやりした考えがわたしの幸運と執着にある意味を与え、正当化してくれた。さらによいと思う理由をあげれば、今日でもわたしは、多くの、わたしを残して去った人々に結びつけられ、それらの人々から認められているように感じている。死者はわたしにとっては生者とたいへん近いものであり、隔てる境界はさだかではない。わたしはずっと後になって、戦争中、獄舎にあって死刑を宣告された人々に囲まれて暮らしていた時、これらのことを再び考えさせられた……」（『回想』第1章）

そういえばセルジュの生涯はどれだけ多くの死者たちによって取囲まれていたことであろうか。『回想』は革命のために人知れず、その生命を投げ出していった無名の革命家たちへの追悼の記録でもある。資本主義社会の圧制のもとで、絶望にうちひしがれながら、空しく死んでいった人々への悲しみの言葉でもある。幼少時代の弟の栄養失調による死に始まり、青春時代の怒れる、「迷

える力」であったアナキストたち、そして革命の成就を願って戦いのために倒れていった内戦の英雄たち、スターリン時代において不合理にも処刑されていた多くの尊敬すべき友人同志たちの死にいたるまで、無数の人々が、かれの眼前でそれぞれ自己の生に対する限りない愛著を抱きながら死んでいった。かれらは、むしろ自己の生と自己の属するこの社会を限りなく愛していたが故にこそ、死をいとうことがなかったのである。そしてまた、かれらはだれにもまして、かれらが属していた現実社会の不条理性を認識することが可能であったがためにこそ、死に到る戦いを挑んだのであった。このような死者とのつながりを意識する時、セルジュにとってはじめて個人と社会との深い連帯感が生まれて来る。それは若者の持つような単なる正義感によって結ばれるような観念的な連帯感ではない。それは「もっとも暗い、もっとも苦しい挫折の底」においてのみ、そしてそのような絶望的な状況の持つ意味を体得した者のみを感じ、知ることのできるものであった。そしてそのような、深い、重い連帯感に結ばれていてこそ、「もっともわれわれのものである思惟は、無数の絆によって世間の思惟と結ばれている。そして語る者、書く者とは、本質的には声なきすべての人々のために語る人間である。」というセルジュの言葉が真実の重みを持つのである。

すでに述べたように若き日のセルジュにとっては、パリにおけるアナキストの不毛の死を真に有意義なものにすることが課題であったはずであるが、そのためにはかれらの本質であった「迷える力」である、内在的なアナキーであるところの、生命のエネルギーを解放することが必要であった。またかれらの孤立した自我が真実の意味で全体的な社会に結びつけられることが必要であった。そしてそのためにセルジュにとって決定的な体験となったものは牢獄の生活であった。そこにはあらゆる種類の社会に絶望した人々の群があった。そして強制的に、不可抗的に自己の生命を奪われようとする人々がいた。それはまさに現実の絶望的な生の象徴であり、縮図であった。セルジュが最初に『牢獄の人々』を書いたのは、牢獄がかれの原体験としての意味を持つ故にであった。『われらの力の誕生』のなかに現われるブルーは、エリゼ・ルクリュの肖

像を自室に掲げるほどの熱狂的なアナキストの一人であるが、第一次大戦中のドイツ軍の爆撃にさらされた或る夜、「脱出は不可能だ。この街、この国、戦争、ヨーロッパ、すべてが牢獄なのだ。」と憤激して語る。セルジュにとってフランスの刑務所とは、「人間を投げこんで押し潰してしまう不条理な機械」であり、「そこでは、ある種の機械化された狂気のなかで」人間は生きているのであった。そして囚人たちは正常な生活への復帰能力をほとんど奪われてしまうのであった。しかしながらごく少数の人々はこの人間を押し潰してしまう「石臼」のなかにあっても絶対に敗北することなしに生き続ける。そのような人々とは、セルジュによれば無法者たちとアナキストである。『牢獄の人々』の第18章『さまざまな人間』(Des Hommes) に続いて19章では『人間』(Les Hommes) と題してかれらのことが語られている。(獄舎のなかでその生命を押し潰されていくあらゆる種類のさまざまな人間に対しては不定冠詞の《Des》を付け、それに反して、徹底的に生き抜こうとする真実の人々に対しては定冠詞《Les》を附している。) 無法者に関しては「すべての社会的価値というものに結着をつけてしまった、^{アフランシ}《解放された人間》は信仰も掟も持っていない、しかしかれらは自己に対する尊敬、自己の力に対する自覚、人間に対する尊敬、すなわち強者に対する尊敬を持っていて、《わたしは人間である》というこの一言のなかに、かれらのすべての誇りがこめられている。」とセルジュは書いている。またアナキストについてはセルジュ自身をも含めて数名の同志がいずれも「力と確信」をもって来るべき人生に向って生きようとしていたのであった。その「力と確信」とは、^{リベ}絶対自由主義者のみを持つことのできた「人間」のなかにある内在的な力への確信であることはいうまでもない。しかしながらこのような力への確信は、あくまでもセルジュの場合は死と直面することによって生まれて来る。だからこそセルジュは「わたしの最初の書物(『牢獄の人々』)は内面の悪夢からわたしを解放するための努力であり、かつまたそこからけっして解放されないであろう人々に対する義務を果たすことでもあった。」と書かなければならないのだ。

『われらの力の誕生』では、作品の題名がそれを示しているように、^{フォルス}「迷え

「^{・エラント}力」が社会的、歴史的状況のなかで、変革への根源的な力となって現われる。無法者たちにみられたような、自己に対する絶対的な確信が、革命という明確な目的を見出し、戦いのエネルギーとなって噴出する。社会＝牢獄に絶望におおわれて閉じこめられていた「^{フォルス・エラント}迷える力」は絶対的な自己の開放、全体的な人間性を求めて爆発する。したがってその目的は、社会の改革にあるのではなく、あくまでも全体的な人間の回復、「絶対的な自由」の追求にあるのだ。そのことはセルジュとボルシェヴィキとの関係にもっとも端的に現われている。セルジュは次のように語る。「わたしはボルシェヴィキに反対でも、中立でもないであろう、わたしはかれらとともに行動するであろう、しかし自由に、思想と批判精神を捨てることなく歩むであろう。……かれらは頑強に、勇気を失うことなく、すばらしい情熱と慎重な愛情をもってまさに必要なことを成就したのであった。すべての責任を負い、率先して事にあたり、驚くべき魂の力を証明し、革命を成就したのはかれらだけであった。」（『回想』第3章）もちろん政治的な亡命者として、反スターリン派の一人としてソヴィエトを追放された人間として、セルジュが政治的な意味でボルシェヴィキに対して好意的であるわけがない。かれはボルシェヴィキの犯した政治的偏向を激しく攻撃する。さらにチエカ、ゲペウなどの非人間的な弾圧行為を追求しようとする。しかしながらセルジュのような、絶対自由主義者にとっては、なりよりも重要なことは、「驚くべき魂の力を証明し」、人間の全体性の回復のために「必要なことを成就する」ことであったはずである。わたしはセルジュとボルシェヴィズムとの政治的関係を論じようとしているのではない。政治的にみるならば、『回想』を書いている時点でのセルジュは、すでにその役割をまさに終った人物であり、あまりにも人間的であり、むしろ故意に革命の進行のデテールに対する政治的な判断を避けているようにさえ思われ、わたしはあまり好意的にはなれない。（『革命第1年』、『革命の運命』などの政治的ドキュメントはそれぞれの時点でのセルジュの政治的立場を明白に示したものとさえいよう。）したがってセルジュが「わたしは革命家への道をすすまないことをはっきりと決意した。生命の危険が過ぎ去れば、新しい制度の内部にある悪と戦おうとする人々とと

もに自分の道を見出す決意であった……」と内戦の最中であって書いたことは、かれのような人間にとってその行動の唯一つの目的は『絶対の自由』の実現にあったのであり、「精神の自由と自由の精神をもって」ボルシェヴィキの内部であって、自由を疎外しようとするもの一悪一との果てしなき戦いを続けることだけが、真の意味での、「脱出」を可能にすることであった。

このようなセルジュの人間的な態度は、『われらの力の誕生』においてもすべて貫かれているといってよい。かれが好んで描こうとするものは、革命を支える内在的なエネルギーの爆発と燃焼である。政治的、社会的な状況と人間との葛藤はその場合問題ではない。このような生命の高貴な燃焼を可能にするような人間一無法者とアナキストはすでにかれらを取り囲む社会的な状況とは、絶望と死を通して絶縁している。かれらにとっては、どのようにして権力を奪うのかという政治的問題は、本来は無縁のものであった。それは、「革命家」の問題であった。いかにして「権力」を維持するかという問題もまた二次的な問題であった。（もちろんセルジュ自身がこのような問題に関して全く無関心であったというわけではない。セルジュ自身はアナキスト・グループのこうした傾向をあまりにも感情的すぎるといって批難しているし、かれ自身はボルシェヴィキの一員であった。）しかしながら、まさに必要なことは、「驚くべき魂の力」を見出し、それを発露させることであった。「戦うこと、いったいそれ以外になにをなしうるのだ、そして滅びること、それはさして重要なことではないのだ」と叫びながら絶望のなかで倒れていった、無数の迷える死者たちの魂と深く結ばれた連帯感によって、「不可能な脱出」を可能にするような魂の燃焼こそもっとも重要なものであった。『われらの力の誕生』のなかで、そして『回想』のなかでも同じように語られている、バルセロナの闘士ダリオについてセルジュは次のように語りかける。

「ダリオ われわれはこのかぎりない戦いの果てにいつかは倒されるであろう。わたしは現在とわれわれに疑いを持っている。……この町をわれわれの手で奪うことは可能であろうか。ダリオ、もしわたしがこんなことを大声

で語ったならば……、きみはいっただろう。『ぼくはすべてを奪うことができると思っている、すべてを。』われわれはなにも感じられなくなるその瞬間までこんなふうになれわれを不滅のものと感じているのだ。そしてわれわれの血の一滴が大海に帰してもなお生命は生き続けるのだ。このとき、わたしの信念はきみの信念に再びつながる。未来は大きい。……」

ここには見事に死を超越した人間への無限の愛情と信頼がこめられている。戦いの勝利が問題ではない。敗北することも問題ではない。もっとも重要なことは、人間の歴史のなかで、人間によって発露される生命の力であって、それこそ、セルジュにとっては、もっとも価値あるものであった。したがってセルジュにとって文学とは、そうした本質的な生命を表現することである。すなわち、「書くことは、より強い正当化を必要としており、人々のために、その大部分がそれを表現する術を知らないままにいるものを表現する一つの方法であり、全的^{コミュニケーション}一致の一つの方法であり、そしてまた、わたしたちを貫いて流れ去って行く大きな生命、その本質的諸相を次に来るものたちのためにわたしたちが捉えようと試みなくてはならない大きな生命の流れについての証言」であった。このような視点に立つことによってのみ、セルジュは革命における政治的实践と自己の文学的営為を同一のもの、等価値のものとするのが可能であった。このような次元では、政治か文学かといった問題の提起はあり得なかったし、セルジュにとってボルシェヴィキの内部にあって、あくまでも「自由の精神」をもって制度に内在する悪と戦い、人間の全体的な解放を目指す営みが不可能になった時、セルジュはためらいもなく自己の文学的営為にそのすべてを賭けようとしたのであった。そしてセルジュがそこに描き出そうとしたものは、単なる革命とその時代に対する歴史的な証言ではなく、その歴史を支え、歴史に働きかけ、歴史を変革しようとする人間の魂、すなわち人間の内部生命の発露であったといえよう。そして、そのような人間の内部生命の燃焼がある限り、人間とは永遠に、「不可能な脱出」を可能にするための、たえまない戦いを続け、人間の全的^{コミュニケーション}一致を求めてやまないことをわたしはセルジュとともに確信したいのである。本稿では、セルジュの後期の作品、すなわち、スターリン独裁

体制の強化されるなかで絶対自由主義者^{リベラル}たちが、あらゆる意味の迫害のなかで生きなければならなかった暗い宿命を描いたとでもいうべき部分については触れなかった。それはおそらくアナキズムの持つ宿命であると同時に、所謂、政治的なものと文学的なもの、自発的なものと意識的なもの、自由と体制などの問題に関して、さまざまな未解決の問題を含んでいる。そして、変転きわまりない、セルジュ自身の生涯がそのことを如実に物語っているといえよう。『トゥラーエフ事件』を中心とした作品群に関しては、また改めて述べなければならぬのである。

注

- (1) Victor Serge, *Les Révolutionnaires Romains*, Edition du Seuil, 1967
- (2) セルジュがマルローに対して、種々の意味で親近感を持っていたことは、両者の思想、行動、文学などを比較してみると、肯ける要素が多分に見出されるように思われるが、マルローは『アンチメモワール』のなかでマルセーユで対独抵抗運動中にセルジュにあったことを記している。またその後メキシコに亡命してからもセルジュはマルローに手紙を送り自己の心境などを述べている。
- (3) ジョージ・ウドコック、白井厚訳、『アナキズムⅡ』紀伊国屋書店
- (4) Daniel Guérin, *L'Anarchisme*, collection «Idées», réédition 1969
- (5) “Les Temps nouveaux” Jean Grave によって主宰されたアナルコサンディカリズムの傾向を強く持った雑誌
- (6) Daniel Guérin, *Pour un Marxisme libertaire*, Robert Laffont, 1969